



次代を担うホープ防災リーダーズ



岐阜県本巣市教育委員会
参事兼社会教育課長 野原 徹二

1 「防災リーダー」の育成

南海トラフ地震が30年以内に80%という高確率で発生と言われる今日、濃尾地震の震源地である本巣市においても、その備えを強化しているところです。

高齢化が進む今、これからの防災は、若いリーダーを育成し、持続可能で防災力が高いまちづくりをすることが不可欠です。本市では、令和3年度に濃尾地震発生から130年を迎えたのを機に、独自に防災リーダーの育成を本格的に始動させました。

毎年夏休みに市内中学生を対象に、岐阜大学教授によるジュニア防災リーダー養成講座を実施し、防災や減災につながる様々な方法を体験的に学び、受講後は地域や学校で活動しています。令和6年度から東日本大震災の地で被災者や避難所運営経験者、同世代の語り部との対話や震災遺構で当時を想起する体験的な研修を実施しています。

2 「中学生防災士」の誕生

ジュニア防災リーダーの一人が、自学で防災の学びを進める中で、より専門的な知識を身に付けたいと、自ら岐阜大学の門を叩きました。防災専門の教授から学び続け、中学生防災士第1号が誕生しました。その生徒の背中を追い、防災士資格取得をめざす生徒が後を絶たず、現在では、市内中高生40名以上が防災士となりました。彼

らは本市の防災の一翼を担って活動しており、目を見張る活躍をしています。

3 「ホープ防災リーダー」の活躍

様々な研修を通して知識・技能を身に付けた生徒は、学んだことを自ら発信する活動へと発展させました。中学を卒業した高校生も含め、志の高い中高生たちからなる防災組織を「ホープ防災リーダーズ」とし、市内全域で活動を展開しています。

(1) 市防災訓練への参画



市防災訓練での啓発活動

毎年、市内で行われる総合防災訓練に参画して、防災リーダーたちが市民向けに防災啓発活動を行っています。

身近な物を使った防災グッズの作成方法や災害時のトイレの使用方法など、自分たちが考えた備えを手作り資料を基に、誰もが分かりやすい、災害への備えや災害時の対応を市民に熱く語ってきました。

(2) 地域での啓発活動



市民への防災啓発

市内大型商業施設に出向き年に数回、啓発活動を行っています。新聞紙を用いたスリッパ製作や防災食の試食、自ら考えた非常持ち出し品の展示など、体験的に学ぶ防災フェアを企画運営しています。味覚や視覚など五感を通して実感できる資料も作成し、簡単に実践できる災害への備えなどを語り、市民の防災への意識を高めています。

また、自治会の要請に応じ、大人や小学生らへの講座や手作り資料を使ったゲームなどを通して災害への備えを伝えています。

これらの啓発活動は県内に広がり、市外からの視察や岐阜県で行われる防災に関する「政策オリンピック」の審査員も依頼されるまでに成長してきています。

4 「キッズ防災リーダー」への発展

彼らの活躍を目の当たりにした小学校高学年児童から「ぼくも防災リーダーになりたい。」「防災を学び役に立ちたい。」との声があがり「キッズ防災リーダー養成講座」をスタートさせました。

ホープ防災リーダーたちが、主体的に、この講師となり、手作り教材で児童が体験的に楽しく防災について学ぶことができる

よう工夫しています。まさに、持続可能な市の防災体制が構築されました。



キッズ防災リーダー養成講座

5 次代を担う「防災リーダー」

これらの活動を通して成長した彼らは、当事者意識が高く主体的に動き出す姿へと進化しました。

自らが先頭に立ち、学校に防災チームを立ち上げ、校内の危険箇所の点検、実践的な避難訓練の提案など主体的に活動する姿へ変容しました。

さらに大雪の日には、自宅近くの消火栓が雪に埋もれていることに気付き、災害時に備えて、自らの判断で除雪するリーダーもいます。



当事者として

この他にも、能登半島地震の復興支援に何度も足を運んだり、進路先を防災関係に決めたりするなど、自ら動き出し次代を担う防災リーダーが育っています。

今後、防災リーダーを中核にすべての市民が当事者となって行動する防災のまちをつくりあげていきます。